



Title	頼梅颯書簡
Author(s)	
Citation	懷徳. 1986, 55, p. 74-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90665
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

資料報告

「頼梅颯書簡」

本書簡は、頼山陽の母梅颯（頼静）より、中井碩果の妻中井悌にあてられたもので、他二通と共に大阪大学懐徳堂文庫所蔵の「先哲手簡」第五巻に収められている。

飯岡義斎（篠田徳庵）の次女である梅颯は、悌の従姉にあたる。又、安永八年、中井竹山の媒妁で、頼春水に嫁しており、悌とは書簡の外、季節毎に見舞の品などを親しく贈答している。

書中の七郎は中井碩果、重五郎は篠田恭斎である。重五郎は、飯岡義斎の弟滄浪（二代目徳庵）の子である存斎（三代目徳庵）を父とする。書中に言う剛蔵とは、この飯岡存斎のことで、文化十一年七月十一日に没している。その一家退転の後、重五郎は懐徳堂に引取られているが、天保七年十二月二十八日、享年二十三で没した。おちは越智家。越智高洲（文政九年没）は尾藤二洲に学

んだ後、中井履軒の門下にあった。高洲の妻も、とも又、篠田（飯岡）氏である。また佐一郎は、頼春水の弟杏坪の長男、頼采真である。

この書簡は、『梅颯日記』天保八年の記事、「自中井、書状来る。正月廿七日出、ほしかぶら贈来……篠田重五郎、病氣養生相不叶、十二月廿八日死去の由告来」（二月八日）、「梅颯、瀉折々、せうかつもあしく、今夕、やきしは、所々へあて、くつろぎしゆへか、しばらく手水も遠き所、深更、大にとりはづし、絹子起て、大に世話に成」（八月二十三日）などと照して、天保八年九月十六日に認めたものとみなされる。

（口絵及び七七頁写真参照）

幸便ニ任せ態と一筆申入候
時分柄冷氣いやましニ候所

其御地御揃被成御さゝハリなく□ましく

御入被成候御事とめてたく存まゐらせ候

扱々久々御物遠ニそんしまゐらせ候

大ニ御無沙汰申訳もなき

次第ニ御さ候春の御ふミニも御返事

不申夫があつさの御見廻又

此間ハ古林かの家來のほり便

御ふミニ御ことつけ段々忝春の

御ふミニも相かはらす干かふら御菓子

おくり下され夏の御ふミニも御菓子

松風御おくりたん／＼忝存まゐらせ候

つまらぬ歌共よミニ御礼ニと存

居候様の事それもさた過出し

おくれに成申候七郎様いかふ御すくやか

御痰もあまり不申よし大ニ御仕合

ニて候此もとかわりなく候へとも

わもし事久々はらし引つり

いたミ六月朔が医者ニかゝり

ほん前迄薬たへ候へともさして

きゝめも見え不申まつ怠口いたし

居候所又々八月十七日又々いたミ

つよく成ひろうなから二便ニも人手

かゝりねかへりも出来事ゆへ大ニ

難義又々医者ニかゝり薬ふく用

薬湯ニなと入申候間それかよろしく

候敷すこしねおきもやすく成

よろこひ居申候とふても新寒ニ

あたり候事かと存候されともしよく事

かゝる事もなく氣ふんもあしく

なく候ゆへ大ニよろしく御さ候それとも

右の事左へもいたし不申よふも／＼

しよくてもこなし候事存候尤

すくなくも候へとも何の事もなく候

此中の御ふミニハ剛藏殿廿

五年ニ候よし誠に早きものに候

重五郎存生に候ハゝとむらひ被申候

扱々あわれなものに候実母は如何ニ

成被申候哉早のゝはゝ様ハ如何なられ

候哉はや故人ニ御さ候や中村門治

たつ者に候よし一頃わつらひ被申候

よし又快今ニてはつとめ被申□□／＼

すくやか成事ニ候おのれと同年ニ御さ候

御序も候はゞよろしく御つたへ下さるへく候

手さきノ事は其様ニ不自由もなく

ゆかミなりにかやうに物もかき候へとも

一かうに座上のほこうも成かた

たんそくいたし候事に候せんたい

なんそ年玉のしるしニ進申度

それもいたつらにすこしそれたに

文も延引に及ひとふも冬の

うらの海苔も□箱もさ□

田舎の事にてちよつしたる進し

候様のものもなく又出されもいたし

不申たま／＼菓子などもらひても

ばしよへハ出されもいたし不申誠に

かれ是心配いたすのみにて何のや□

立不申おのつから御ふさたニ成申候この度□

何のおあいそもなく候へともあまり

御ふさたに成御氣つかひも給はり

候事ゆへいきて居るしるし計ニ

おもひおこしてしたゝめ申候おち

ニも御かはりなく候よし是がも御口つけ

御さ候へとも同し事ニ御ふさたまつ／＼

御ゆるし下さるへく候御序もあらは

よろしく御つたへ可給候暮ニも及び

候まゝ山々申のこしまゐらせ候さそ

御かた付の御そもしかたもミな／＼

御すくやかに御入とめてたく存候治へ

いどのもさそ御無事とめてたく

存まゐらせ候御子も御同様とめてたく

御たかひにそく才ニいつ迄もとそんし

候事ニ御坐候右之通暮に及ひ

一六の便ニ候半まゝ早々に筆留

まゐらせ候追々寒さも増申

候はんまゝ随ふん／＼御用心可被成候

めてたくかしく

九月十六日

梅麗

おてい様

まゐる

尚々よミかへしもいたし不申

訳いかゝと存候御はんし下さるへく候

此様ニいたし居てもまだ腹□ニて候まゝ

それハくくつうなる事ニ候夏の
はしめ御砂もちかニ御地大ニ賑ハひ
候よし佐一郎ども申こしきもを
つふし候事ニ候

(解題)

(書簡解読)

福田	福島	時松	高橋	福島
安典	理子	孝文	雅彦	理子



頼梅廻書簡 (冒頭部分)